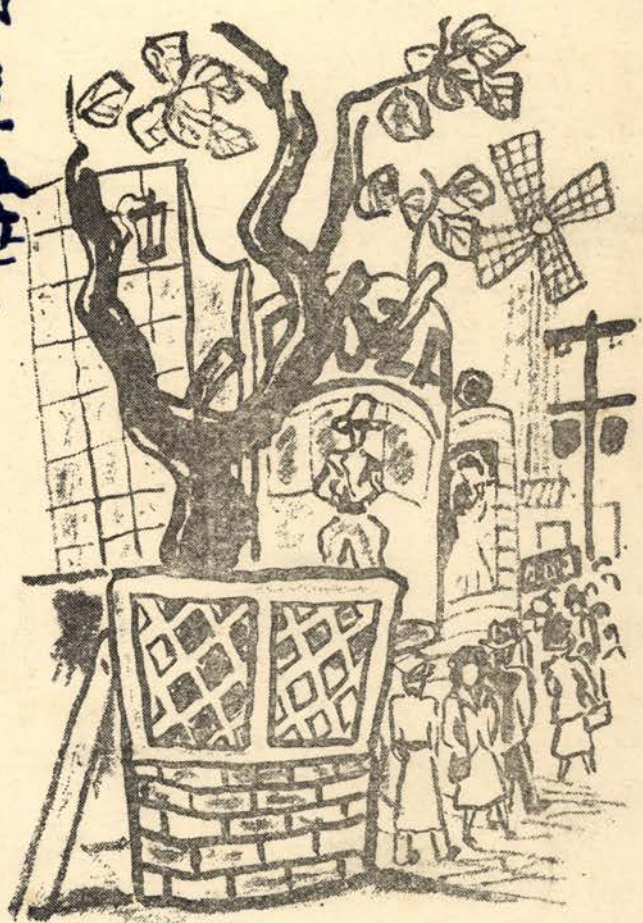


川  
柳  
の  
雄  
証

麻生路郎☆主筆

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi



七月號  
No.278

昭和廿二年七月一日第三編郵政特許  
 昭和廿五年七月一日發行第五卷第七號  
 (每月一圓二日渡) 創刊大正十三年・通卷二百七十八号



# 雨を語る

出席者

麻生路郎・麻生葎乃  
中島生々庵・水谷鮎美  
須崎豆秋・横田方眠

豆秋||それではぼつ／＼始めませう。今年も、もう梅雨の季節になりましたが、今日は句を通して雨を語ることに致しませう。方眠さんは測候所に勤めて居られるのですから、一つ貴方から何か……。

生々庵||やつぱり職業上必要な人もあるのですな。  
方眠||個人の職業上とか團體の災害防止とか農業方面と言つたやうな關係の人が沢山いて来るのです。  
豆秋||天氣相談係と言ふのがあるのですなあ。  
方眠||さうです。処が一般の人は天氣相談係を知らないで大概測候所の予報係へ電話が掛つて来ます。特に日曜日など引つ切りなしで應接に暇がありません。  
鮎美||方眠さん、先程のお話では若い方も居られるやうですが、私達一般素人から考へてみますと、じみな仕事をし居られる氣象台の方は相當の年配の方々が大半だと思ふのですか……。

方眠||どうして仲々、年のいった人ばかりぢやありませんよ。若い人も沢山居ます。  
成程鮎美氏の言はれるやうに本當に縁の下の力持のやうなじみな仕事ですが、若い人は若い人なりに学徒として一生懸命にやつて居ります。  
鮎美||ホホウ、そんなものですかね。この世智辛い世の中に。  
方眠||本當に我田引水のやうですが、涙ぐましい程ですよ。  
豆秋||雨と言へば亡くなつた紳樂さんを直ぐ思ひ出しませんが、紳樂さんは雨が好きでしたなあ。  
方眠||それで私も紳樂さんの句に雨を詠んだのがあるかと思つて以前の「川柳雜誌」を調べてみましたが、一寸見当りませんでしたかあ。  
鮎美||さうですな、梅雨の句がありますが、大体紳樂さんに限らず雨の句は少いです

な。  
豆秋||氷雨してもろこがうまい先斗町  
鮎美||課題吟の「雨」の選で軸吟に  
苔が静かに雨を吸つてゐる  
(紳樂)  
と言ふのがあります。  
路郎||紳樂君は非常に雨が好きて雨が降り出したら必ず何処かへ出掛けて行く。例へば笠置だとか雨の風致のありさうな処へ行つて料亭に上り、酒があまりいけないので料理ばかり喰べてゐては仲居が相手にしてくれぬ。そこで銚子一本だけとつて後は料理ばかりどし／＼持つて来させてゐるんやと云つてゐた。  
鮎美||方眠さんが眠声と言はれてゐた時代の句で  
奈良は雨大佛だけを見て戻り  
と言ふのがありますね。  
路郎||奈良と言ふ処はよく雨の降る処で子供の時分学校から出かけてもよく雨に逢つたものだ。  
方眠||奈良とは別ですが、日本で一番雨量の多いのは大台ヶ原で極く最近まで大台ヶ原に観測所がありました。が、經費の關係等で今廃止になつて居ります。然しロボット観測所の設備があると聞いてます。  
路郎||生々庵さんに雨の句

生々庵||今奈良に雨が多いと言ふことを聞いて思い出すことは奈良に行くの大抵雨に逢ひます。つつと以前に大佛殿の近くで雨に逢つて大佛さんの伽藍に逃げ込みましたが大佛と雷の凄いのが伽藍の中まで響いて来て、今も忘れません。そして暫くするうちに雨が上りましたので若草山の方へ友達を案内しましたが、其処に大きな虹が綺麗に掛つてゐるのを今でもはつきり覚えてゐます。その時の句が大雷雨虹一本を置いて去にと言ふのです。  
路郎||今俄雨の話が出たが亡くなつた松雨君に  
俄雨一尺の軒見て走り  
と言ふ句があるが、これは奈良のやうな都会でなくて大阪のやうな都会の俄雨を詠んだ句であると思ふ。

男女両性に作用する  
プレホルモン  
魚野義製薬 皮下注射・錠劑

豆 秋 俄雨とか雨宿りでは古句に面白いのが沢山あるやうですね。

路 雨宿りゴーンと撞いて叱られる云うような。

路 雨宿り惜しい娘に傘が来る本降りになつて出て行く雨宿りもせぬものゝ値をきく

雨宿り などがあつた。俄雨の句では牛方のあきらめて行く俄雨

と言ふのがある。何れも古句と思ふ。

美 極く最近に俄雨で私が感心してゐるのに

俄雨パンパン圖書館に入り

これは見下け果てられてゐるパンパンの或向上的な情景で、こうした娘も少しはゐる。唐人お吉です。

面白いのには

雨宿り戀になるとは知らなんだ

定九郎まねてもみたい夏の雨

梨里ちやんの句に

佛滅に遊びに行つて雨にな

路 雨宿りそれは奈那が外出したんやろ、私の家では奈那が外出したら例へ少しでも降る外になつてゐる。

美 ほんまでつか。

路 雨宿りその変り僕が出たら晴れる。私は不思議と雨に逢はない。然し雨は降るのであるが私が電車に乗ると降り出し目的の地へ下車すると晴れてゐる云うやうに殆ど雨には逢はない。嘗て北支蒙疆の旅を三十五日間もしたが、その時に傘の必要はなかつた。

梨里 どちら降らないの

と違ふの？

路 雨宿り張家口当りは降つても割に早く上るらしい。熱河へは行かなくて土の中に埋る位雨は降るさうだ。(霞乃に向ひ)不思議な位やなあ。

腹 乃 實際不思議でつせ。

豆 秋 傘屋サツパリやなあ(笑)

路 雨宿り此の間も講演旅行で西下した時小郡で鉄道クラブに入つて食事をしてゐたら降り出してそれから汽車で湯田保健所へ行つたらどしや降り

になつて、翌朝立つときにはカラリと晴れていたからね。

生々庵 雨はそれと反対に雨男でしてね、書生時分に九州へ帰るときに妹達が「もう兄さんが帰る頃やなあ」と言う

と親父が「まだ雨が降らんから帰らん」と言つたもので、心斎橋の雨具専門の雜貨屋の主人が「先生はうちの守り神さんや」と言ふ位雨男で通つてゐる。

豆 秋 雨男だと農村なんかで喜ばれる方ですなあ。農村ではこれから日照りなどの時に雨乞ひと言ふのをやります

が、雨乞ひの句は沢山あるでせうね。鮎美さん!

美 昭和十四年、十月の川維本社句会で雨乞ひの五選がありまして、いふのを読み上げてみます。

雨乞へ思はせぶりな雲があら

雨乞にお地蔵さんをかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

路 雨宿り生々庵をかつき出し

豆 秋 富士野鞍馬氏がかつて「川柳雜誌」へ書かれた文章による、京都の神泉苑で弘法大師は御祈禱で、静御前は舞

で、小野小町は歌を詠んで、言ふふうにあの手の手で雨乞ひをしてゐるが、小野小町のときは歌がよう効いたさう

か、三日間も降り通したさうです。翠光君の農村などで日照りがあつたら雨乞川柳会

などをやつてみると歌でさへ三日も降るんですから川柳やつたら一週間位降りまつせ。

生々庵 雨乞川柳会には是非僕をよんで頂きたい。(笑)

路 雨宿り鮎美君芝居に雨の芝居があるで……

鮎美 雨宿りさうですなあ……妖季の雨は「祇園祭記」亡くなつた市川團治の早変りの「雨の宵宇都宮詣」これは本当に鮮やかなものでした。この頃ではこうした早変りのケレンは見られないでせう。「小野東風青海硯」「假名手本忠臣蔵」の定九郎……

豆 秋 心中宵庚申

鮎美 さうでんな幕切れの場でさ

路 雨宿り熊太郎彌五郎「河内十人斬」の場でもえらい雨や稲光りがして

鮎美 雷雨では

路 雨宿り雷雨では

路 雨宿り雷雨では

山の段。その他時代物の新作ではよく雨を利かせて、その時々効果上げています。

路 雨宿り旧劇の雨は夏芝居に多いね。

鮎美 演つてる方も観てる方も涼しおまつさかいな。

路 雨宿り最後に五月雨の古句

井戸繩の繕ひ上げをする五月雨

と言ふ句がある。五月雨で井戸の水が増してつるべの繩を短くして括つておくことを詠んでゐるのだが、中々細い処を見つけたものである。

それから

さみだれに傘を借りてゐたわけ者

と言ふやうな句もある。

豆 秋 先生に

繪に畫いたやうに田植に雨が降り

と云うのがありますが、これもさみだれの句です。

それでは又降り出すと困りますから今夜はこれ位で……どうも有難うございました。(梨里筆記)

最短時間 結句

大阪 名古屋

3時間25分 特急

毎日3往復

近畿日本鉄道

上本町 7.40 12.40 16.40

名古屋 8.05 13.05 17.05

特急料金 ¥50





堺市 中島生々庵

新築へ祖父傳來の古机

小なりと雖新築木のかほり

空想と云はれ当人むきになり

大阪府 武部 香林

もう量が減つたと米壽まだ飲む氣

顔色を氣にして妻は首尾を待ち

へのやうに云われ文科に入学す

文学を論じ赤字をまだ知らず

ちよぼくのうちがうちかと競ひ合ひ

着飾つたのはパンくだ悲観すな

兵庫縣 戸倉 普天

美しい人乗つて来て京近し

コンクリートの隙にも草は萌へんとす

入学試験に元の先生ついて行き

何をするかよ女の終電車

横浜市 福田山雨楼

土曜日がわが人生の希望らし

電車待つ間でも柱にもたれる日

老妻と壽命を話す夕まぐれ

横向きもあるバラックの戦災地

加配米みな飛びつかぬ世とはなり

池田市 戸田 古方

春雨が絵になつてゐる筏のり

校長の居間茶道具の一揃い

寛印もついでにすます雨やどり

東京都 前山 北海

浦島の眼に沁む部屋年青疊

浦島へ柳の街の美しく

布哇 内藤草一郎

三味持てば男で苦勞した音色

爪を染めながらどつかへ行きましよう

何んですか顔や年には惚れません

眼の会釈丈けで互に連れがあり

本宅の方が手当て暮らし立て

兵庫縣 大坂 形水

抱いた子の靴が片一方見当らず

表烟へ消えてしもうたランドセル

大阪府 福田 安夢

百円がのうて死んだらかと思ひ

唇を吸はしてからの凄腕

裸ショウ僕もハダカさはつはつは

ライターのかなしき油がきれてをり

岡山縣 浜田 久米雄

お茶碗の壽命まだく洗はれる

終列車まではサンマタイム飲み

女工哀史三面記事をこわく読み

平塚市 木村 孤浪

新しい靴穿く朝は汽車が混み

まあ少し鉄をおけてて汽車が行き

媚態忘れぬ女のるねむり

子を思ふ親になるまで親はまち

丁寧に切れよ二等の切符だけ

学藝会の写真わが子を先づ探し

大牟田市 高田 抱逸

手招けば友も手招く酔うてゐる

相当の原書を読んで識られ

社を辞めて識になるよな飯を炊き

大阪府 市場 没食子

愛情を月の手当て囲われる

春將に酣花でかせぎ貯め

身を落してもく職がなく

末ッ子入學

あまへたの脊にもいよくランドセル

名古屋市 吉田 水車

神様へまさかショウチュウども言へず

氣前よく煙草を捨てる春の宵

四月二十三日妻退院す

ありがたや起死回生の荷をまどめ

大阪府 須崎 豆秋

役人へ余分に一つお辞儀する

区役所には惜しいべつびんさんが居り

この辺に住みしことあり夕まぐれ

まだ脈があるよ女にひつばられ

大阪府 北川 春巢

昭和廿五年四月結婚十周年

十年が世渡りべたのまゝで過ぎ

憲法發布記念日

基本的人權畫の風呂に居る

父と子と車窓へ向いてガムを噛み

一人茶を飲めばみな飲む子沢山

祝還曆

六十一孫の重みの嬉しき日

奈良縣 尾崎 方正

かき眉毛汗に光らし逢ひに来る

歩で飛車を玄關番が心得て

親になつたと細腕凝つと見る

葬ひえお乳張つたと生々し

下関市 櫻川 不水

鉢巻をひねり直して負けて呉れ

春の川隅田辺りて弛るくなり



岡山縣 大森 風來子

立読みの目先へぬつと出るハタキ

三段スイッチつけて新居が出来上り

看護婦の恋屋上の風に立ち

大阪府 木下 幽王

ひきつゝた笑顔よ商魂火と燃えて

此の期に及んで立志傳など聞される

小供重態に陥る

俺の子が死にかけてるのに電車がのろい

出雲市 尼 緑之助

朝からどなり一票願ひます

長男東京遊学(二句)

東京の風よ金のない親を持ち

角帽の写真妻うろくど置きどころ

よく呑んで呑んで運命論者にて

五十過ぎ男の夢に参議院

大阪市 水谷 竹莊

逢ひに行く靴とは知らず磨く妻

その氣持解ると酒をすゝめられ

酔ざめの水持つてくる長襦袢

廣島縣 弘津 柳慶

港の灯哀愁おびて船出する

候補の名をどなつてトラツク通り過ぎ

下関市 國弘 牛休門

建て増しをして五年目を苦しむ氣

視界無し貴郎まかせのひざ枕

岡山縣 山分 淑郎

カンフルの最後へ二号無表情

無遠慮に酔ざめ所望してしまひ

封きらぬまゝで破つてすてた梅

灯を消せば淋しいものに僕の室

大阪市 富岡 淡舟

三階四階五階窓からメーデー見送りぬ

汗のシャツ夫の臭ひ感じて居

奈良縣 飯降 白香

ウンと飲めかまふものか金は考へんどこ

朝から晩までごみの中で十九の青春

奈良縣 西辻 竹青

大官の様に税吏のそりかへり

鬭争も考へるべき時となり

吳市 林野 甦光

首実檢それとは娘よう言わす

土産ふと買ふ氣になつた酔心地

氣まぐれの千円札が僕へ来る

未亡人もう氣まぐれを承知せず

えりあしの白さへ檢事眼をそらし

ダンサーに足を踏まれた日から凝り

脚光を浴びて闇船御到着

大阪市 竹田 芦穂

板前に昔從卒した自慢

洋食の模様に蠅はだまされず

蜜蜂は訴へもせず又貯める

お辭儀するだけに喪章をつけて来る

生花よりも見て貰うたい金屏風

大阪市 上田 春柳

春らしく笑えど彼は病んでゐる

百貨店

早よいねと言わんばかしにベルが鳴り

娘同志で嫁に行かない指を切り

夕やけへ別々なこと思つてた

後家だから馬鹿にしていると思ひ込み

飲む人は嫌よいゝわと姉妹

特權のやうに青年議論して

布施市 森下 愛論

ホーキにも妻の個性が現れる

うっかりとほめたおかづは続けられ

終電にあふれて歩く行狀記

藥石効なく女は妊娠し

大阪市 太田 良子

昇給の分だけ今日は飲むつもり

ほんまだつかと云ひゝ矢張りついてくる

ヘルですと紹介された戎橋

尼崎市 靜岡 忠八

人民はだまつて死ねと云ふ政治

反対派言論戦で勝つつもり

大阪市 伊藤 定美

ミスボリス見返すための志願です

ゴシツアの如く彼氏でいて欲しく

母様に出す文面をひやかされ

岡山縣 直原 七面山

満される虚榮へ女身を任せ

七轉び八起き恋愛戦に立つ

ラストバンドへ化粧も崩れ身も崩れ

バイ〜に恋のジェスチュア見せる年

キツスだけよと戦後派娘あわてない

興覚めた二人の声のとがりやう

夢食つて娘は細く生きてゐる

踊る女轉ぶ女とも見へて

恋も亦三千年の歴史もち

抱擁の一瞬天地皆消へて

二人の幸福鯛の二つ切り

酔へば出る君若かりし頃の恋

修道院処女の香りのみちみちて

岡山縣 黒田 笑泉

税務署は笑つてばかりとりあわす

めでたさは女房も牛も無事に生み

そろ〜と電話が欲しい儲け様

谷川の水一尺の音をたて

宇都市 上林 粗影

金策も浮ばず煉炭つゝく癖



たんば、れんげ供米まだの村  
大阪から上手な嘘を習つて來  
鯨幕あゝ五十年を逃す夢  
子を叱ればブギ／＼唄つて出る  
葬儀の短かさ犬もついて行き

社長の急逝に

逝く春の風にのつたる佛にて  
泣くばかりにて一ト七日二タ七日  
上手かつた嘘をあこから笑ひ合ひ

鳥取市 河村日満子  
兵庫縣 田代 尋  
兵庫縣 家 沢 薺花

失業をしても自惚れだけは持ち  
習慣の軽い頭をまた下げた  
外野手のバック櫻の眞盛り  
ママさんの塗る間をパパに抱つこされ  
ハンストのそばで儲ける靴磨き  
孝行をようせず子にも期待せず

滋賀縣 黄 瀬 美 秋

折箱の流れて來るも春の川  
すねてゐる肩は抱かれる型になり  
着更へする早さも女としてのもの  
無鉄砲なのが出世をして戻り  
謹切の急なことには見当らず  
へそくりを当てに次男が店を持ち

岡山市 藤 本 満 年

ブロンデーらしく振舞う婦人の口  
女教師の青春包む紺サージ  
相の手に子供も泣いて婦人会  
足元へ來て鶏は飛び上り  
完納の村中学は落成す

候補者の金のないよな顔もせず  
患うていても親父は頑固なり  
幼な子に土産きかれた客あわて  
大都市は眠りネオンは起きていて  
一字だけ消えたネオンの間が抜けて  
メーデーについて歩いて靴の減り

故郷を去る

引越しの前夜間抜けた部屋に寝る  
十年目に上阪  
徳島縣 姫 田 夕 鐘

道頓堀をいちばんゆつくり歩いて見  
金策が庭の眺めへ通される  
貫い風呂風邪を引いたとも云へず  
別れ話待つてましたと荷をまどめ  
思ひ出した様に神棚掃除する

岡山縣 直 原 湖 月

逢ひませう別れませうと恋忙し  
お別れの言葉に嘘も混へどき  
お別れの橋のらんかん撫せてみる  
課長の子いきなり課長になりたがり  
好物へ夫の箸の忙しい  
頑固さを落目が涙もろくさせ

岡山市 藤 本 茶 々

故郷を去る  
又逢えるそれを頼みに手を離し  
新居に移りて  
今日からは隣の部屋も我が家なり  
母の日に  
母の日だ休めと言われ落着けず  
情別の情を隠して笑はせる  
自己批判ばかりしてゐてみすばらし

大阪市 塩 浜 一 路

喜こばす土産どつかで忘れて來  
浮浪兒の素足へ小さな憤うり  
投資りへ客茫然と立ちつくし  
買物へ昔々の愚痴が出る  
串カツへ安サラリーの意氣が合ひ

池田市 太 田 木 声

恋人のピンボク写真捨てきれず  
女客に妻は嫉妬の音をたて  
骨董を初老の顔へ持込まれ  
旅心地手拭下げてどてら着て  
葉櫻へ立札斜めになつたまゝ

兵庫縣 榎 南 夏 六

受付の机小説伏せて留守  
よく見れば標札もあるガード下  
○  
パーマを何処で掛けたか船の妻  
顔二つ舐れて映画のボスター出來  
駅頭でイキナリ踊る新宗教  
日本髪樂屋のれんに撫でられる  
釣れぬ背中に眠むい鷺

松山市 前 田 伍 健

休職で舞台が変る人生よ  
屍となるとは知らず婿曳し  
喰ふことに心配はなし色のこと  
よろこびを包みきれない差向い  
扶養子さんの結婚を祝ふ

大阪市 橋 本 緑 雨

かけ声が二度ややあつて貨車動く  
夏立ちて蛙のハシリ鳴きに出る  
ブラカード女が持つとすぐく見せ

清水市 富 士 野 鞍 馬



添削希望者に  
窓  
★  
麻生路郎

▼句の添削を希望される方がチヨイ／＼ありますが、私はとても、いそがしいので親しく添削の面商を見てあげる訳にいかない。そこで今度添削会を新設して、葎乃、山雨楼、豆秋、鮎美の四先生にお世話を願うことにした。添削を希望される方は講師を指名して句を寄せられたい。小規は別稿の廣告を見ていただきたい。

▼句の添削と云う仕事は、普通に考えるほど楽な仕事ではない。句の添削希望者と云つても、全く初心の方もあつて、既に多少の知識を持つていられる方もあつて、川柳は初めてだが、俳句を作つたとか、短歌を作つたとか云う短詩型文学に相当素養のある方もあつて、初心者であるからと云つても、添削批評のうけいれ方は一樣ではないからである。

▼川柳に対して誤つた先入観を持つてられる方には、先づその先入観からして打破してかからぬと、幾ら添削しても、実効はあがない。添削をうけられる方には、川柳とはこんなものであると云う

先入観を捨て、全く白紙になつて講師の解説と、添削をうけられる必要がある。

▼簡単な添削はテニオハを訂正して、句の姿を直し、句意を強化することであるが、添削によつて作者の意圖しない作品にアツチあけることは、それがたとえ佳句となつたとしても添削上の邪道と云はねばならぬ。添削は何処までも、作家の意圖の線に沿うて添削しなければならぬものである。斯うした観点の下に添削をすると、原作よりは多少はよくなつても、佳吟として推奨するに足る句にはならぬから添削が多い。佳句にならぬから添削が拙つといは云えないう理由がここににあるのである。

▼添削と云うことは主として字納上の問題であるが、前述の通り字納だけ添削したところで、一向佳吟とならない理由は、作者の思想の問題に繋がつているのであるから、句の内容について検討し、詩想に対する添削者はよき指導者でなければならぬ

いのである。

▼類想句の多い作家に対しては、句そのものは出来ていてもそれが類句であることを説明するだけの準備がなければならぬ。兎に角句として出来ていると云うて何等の注意もしないでは、その作者は類想の世界から脱することが出来ないからである。類想の指適も添削者の仕事の一つであるから、作者はそうした注意をうけた時には、それ等の注意を繰返さされぬよう、柳書や柳誌の耽読を必要とする。しかし何を眺むべきかは添削者の指導に俟つがよい。

▼講師の指名のない場合は当方で適当な講師に添削していただくことにする。

▼添削をうけられる方は作句上のコツを充分呑みこまれるまで継続される必要がある。一回や二回の添削で、すぐ解つたように思はれるのは間違ひである。

又、同じ講師に根氣よく継続して添削をうけられるならば、講師はその作者の思想、環境、年齢等を充分に知悉するから、作者の行くべき道を明示することが出来る、添削の上に画竜点睛の美を挙げることが出来るものである。

▼以上は主として添削をうけられる人たちの知つておかれなければならないことであるが、同時に添削者としてもこの線に沿うて添削をしていただきたいと思つたので、いさゝか注文をつけて見たのである。

社の告板

▼句稿、原稿等は開封、(第四種)でお送り下さい。百グラムまでが六円です。一種でお送りになるため、日方超過でちよい／＼十六円の不足税を徴収されて居りますので特に御注意願います

▼各地柳壇の句報は加里版では、文字不鮮明の場合があり、遺憾ながら読みにくい句は没になりまので、幹事はペン書又は毛筆で清記の上お送り下さい。

▼句稿と消息と併記しないこと、どちらかの係へ渡されると一方の御注意願います

胃酸過多  
胃痛・胃潰瘍に……  
ノルモザン錠  
大坂・武田薬品工業株式会社  
45錠入

添削會  
會員募集

▼添削・批評を希望せられる方は左記小規により至急申込まされたい。

☆入会希望者は住所、氏名、雅号職業、生年月日記入の上申込む事

☆作品は、一人一回五句(会費同封)

☆会費一回 百円(二回郵便切手代用可)

☆添削原稿返送用の封筒に宛名を記載し切手を添付しおく事

☆講師指名のこと(指名のない場合は当方で適当に処理)

☆講師  
麻生葎乃先生 福田山雨楼先生  
須崎豆秋先生 水谷鮎美先生  
申込所 川柳雜誌社内  
川雜川柳添削會



### 中島小兒科診療院の

# 新築を賀する不朽

## 洞會員と

### —後庭に輝く句碑—

リクリエーションの大阪で、外  
 観的には戦前以上にネオンサイ  
 の大阪となつたが、内面的にも、  
 何かと新生面が開かれつゝあるこ  
 とがうかがえる。中島小兒科診療  
 院の新築もその一つに数えること  
 が出来る。三休橋々畔、(元の大  
 坪医院あと)に、新築なつた中島診  
 療院の堂々たる偉容は診療院その  
 ものの發展と云ふよりも、院長中  
 島医学博士の人格に思い及ぶ時、  
 それは大阪に於ける小兒保健の福  
 祉だと云える。

中島博士は、名は達太郎、佐賀  
 の産、大坪小兒科医院の副院長と  
 して多年小兒保健に専念されてい

の人であり、戦時中に於ても、月  
 一回は必ず郷國佐賀に母堂の慰問  
 飛行をされていた。又、自分も医者  
 のことであるから、母の死に目に  
 必ず全えるとは限らないからと、  
 取りすがつたにげなくにふさばしい  
 ものが欲しいと、名匠に親画像を  
 彫ませられるなど、博士の斯うし  
 た逸話は数かぎりなくある。最近  
 博士は母堂とこの親画像を新築の  
 木の香の新しい診療院の階上に  
 お迎えされている。

博士の温い心持ちは、恩師や母  
 堂に限られている訳でないことは  
 敢えて説明するまでもなからうと  
 思う。そのすべては毎月「川柳塔」  
 に發表される博士の川柳を透して  
 うかがい知ることが出来るので、  
 單にその一人を誌すにとどめて  
 おく。

たが、大坪博士が物故されるに及  
 んで、その遺志により医院を継  
 承、何処までも大坪医院として診  
 療を続けていられた。それは大坪  
 博士の令息の成長を俟つて、診療  
 院を恩師の令息にお返ししたい  
 と云う深慮から出たものであつた  
 が、太平洋戦の酷なる頃、國是に  
 よつて他人名義の医院が許容され  
 ず、遂に意を決して中島小兒科診  
 療院と改称されたのである。

曾ては大坪博士の遺志を継承し  
 て、山中湖畔に地を下し、富士高  
 原児童養護道場を設置されるなど  
 恩師を懐うの情、切々なるものが  
 あり、高齢の母堂に仕えては至孝

人にしてはじめて新装の診療院を  
 意義あらしめるであろうと結んで  
 の祝辞に、中島生々庵博士は声涙  
 共に下る答辭を以て應えられ、不  
 朽洞で眞一同は一瞬肅然たるもの  
 があつた。

やがて、兼題「待合室」帖美選、  
 「診察」生々庵選、「達筆」路郎選、の  
 披露があつて句会の幕が閉じら  
 れ、階下後庭で一同記念撮影をし  
 た。撮影が終ると佳酒、美肴を饗  
 せられて祝宴がはじまつた。

余與「物進帳」が里十九(辨慶)帖  
 美(富樫)竹莊(善経)豆秋氏等で堂  
 々と玄人はだしの放送をされた。  
 帖美氏はいささか風邪をひいてい  
 るのでとことわつていられたが、  
 例によつて美肴を發揮される。長  
 唄は竹莊氏の掛け持ちである。宴  
 酣になつて、演技者の指名で次ぎ  
 〇と漫才や歌謡曲や俗曲の妙技  
 が競演され、生々庵氏夫妻、路郎  
 師夫妻まで演壇に立たされる騒ぎ  
 門外不出のスナツプがバチリ  
 〇と撮られ、夕刻芽出度く散会。

五月廿八日(日)の午後一時から  
 診療院の階上で、川柳不朽洞会有  
 志に拠る中島診療院の新築祝賀川  
 柳会が華々しく開催された。第一  
 着に路郎師が葎乃夫人と梨里さん  
 同伴で出席された。多数の會員が  
 次ぎ〇に出席、薺花氏はわざわ  
 ざ篠山から出席された。会場の空  
 氣は一大家族のなごやかさであ  
 る。司会は幹事代表の永田里十九  
 氏で、懸命の活躍ぶりである。

会中は島博士の阪大同期生尾崎  
 方正博士の友情溢る、挨拶にはじ  
 まり、次いで麻生路郎師の祝辭が  
 あつた。博士が恩師を熱愛する誠  
 意の人であり、孝養の人であり、信  
 念の人であることを賞揚し、この

新築に祝意を表して、不朽洞会  
 の有志から後庭藤の棚の下に、路  
 郎師の句碑が建てられた。句は小  
 兒科に因んで、旧作「すべりんこ  
 親は涼しいとこで待ち」が彫まれ  
 ている。その美事な出来栄に、  
 一同眼を見張る。この後庭が患者  
 やその親たちの待合室の延長とし  
 て用いられるところに、この句が  
 特に選られたのである。

句碑の前方、一間ほどのところ  
 には、小型の天神の石像が置かれ

# 大阪そごう

- そごう卸商品館
- そごう梅田食品市場
- 十合商事株式会社
- そごうアベノ店
- 西區土佐堀一丁目
- 上町橋筋京前
- そごう灘波店
- そごう梅田デポー
- 地下鉄ナン(難)上階
- 大阪 駅前

であり、句碑から右え四五尺離れ  
 たところには、生々庵博士の好み  
 で丹塗りの春日燈籠が一基建てら  
 れたので、やはらかい情緒が流れ  
 ている。燈籠の製作は會員清水白  
 柳子氏である。

### 不朽洞會諸子へ

今度は小院復興新築致しました  
 に就いて、不朽洞會員有志の方々  
 お忙しい中に、五月〇〇と御配慮  
 下さいまして、いろいろ〇〇と御配慮  
 盛大なお集りの上、祝賀句会を催  
 して頂き、身に余る光榮に深く感  
 謝致して居ります。にも拘らず、  
 何らおもてなしらしい事も申上げ  
 ず、失礼の段汗顔に存じて居りま  
 す。一々御礼を申上げ兼ねますの  
 で略儀ながら紙上にて御礼申上げ  
 ます。

中島生々庵拜





中島小児科診療院新築祝賀川柳會

美鮎・里梨・之孝・郎路・乃菫・庵々生・代しと・正方・莊竹・子柳白・鈍亞——らか右てつ向列前 明説眞写  
・美種・穂片・因松小・論愛・峯晴・平瓜・骨圃・明恒・拂春・司正・生百・里梅・花齊——列後 子食没・秋豆  
(たつかなら這はに眞写でのたれ温が席出は氏八忠) 氏諸の山貴・栗・菓春・舟淡・九十里・方古・々鋭・牛鳩

兼題「達筆」

路郎選

達筆を馬乗りにして石屋刻り 薺花  
達筆の句碑も百年後に語れ 山雨楼  
達筆のわからぬとこはかんで眺み 久米雄  
醉筆は青葉越しなり額にあり 鮎美  
無責任なこと達筆で書いて来る 芦穂  
酔ざめの水で達筆書いてくれ 副骨  
達筆の手紙はくびをか上げて見 葎乃  
達筆家ABCはきらいなり 尋四  
達筆で最後の手紙さようなら 晴峯  
達筆の集金人は老いている 瓜平  
達筆に異議はなければ字が違ふ 日満子  
年不惑愈々筆に冴えを見せ 没食子  
達筆の硯は昔が生えたよう 苑女  
余技にしては達筆すぎる腕もち 愛論  
達筆で他人行儀な父の文 同  
達筆へ亭主おろし墨をすり 正司  
温泉に來ても達筆用があり 恒明  
鉛筆でなら達筆と言ふ男 白柳子  
達筆の経木書きとはなり下り 小松園  
門標も達筆であり教習の家 普天  
酔ふて書いたと見えぬ達筆 淡舟  
達筆家墨の事にも一寸ふれ 竹莊  
紙を買ふ金を達筆困つてい 小松園  
達筆をふるうラジオを止めさせ 春菓  
榜はいた日の達筆はしやちこほり 同  
達筆は墓石へまで書される 同  
高利貸置に達筆褒められる 同  
御しん筆飄筆型に紙魚は食べ 鋭々  
豪快に呑んで墨痕り入りなり 白柳子  
頭髪をしごいた程の文字でなし 栗々  
達筆だ経木書きでもやりたまへ 種美  
達筆かしらんがむしのくうた軸 葎乃  
達筆を借用証にのこす父 路郎  
いろ文にしては達筆すぎるなり 同

兼題「診察」

生々庵選

代診はこくあつさりと次を呼び 満年  
診察に來て褒められる健康児 山雨楼  
まだ何か言ふて懲しい胃の痛み 茶々  
診察へ一昨からを訴へる 日満子  
新妻のうれしい診察してもらい 美秋  
往診の筈が近所で飲んでいて 野介  
診てもろて薬待つ間をすべり台 没食子  
小児科の診察順に泣いて出る 竹莊  
診察の手許母なる目で見つめ 晴峯  
小児科で父親知らぬことばかり 瓜平  
聴診器母の肺が動かない 久米雄  
乳房まで出すのに医者若すぎ 薺花  
診察へつらばつかとい舌を出し 豆秋  
税金がたつた熱と診てとれり 同  
診察の処女の誇りを胸に見せ 同  
よくならましたなあ診察如才でし 同  
よくなれば又呑めと言ふ御診察 同  
物資の儲み診察して呉れず 同  
嗜血にうなづくだけの御診察 同  
診察を恐れる程に瘦せほそり 同  
診察へ仰せ通りになつてゐる 同  
診察の嬉しい便り母へ書き 苑女  
院長のみたて安心して眠り 尋四  
物思ひ続く診察室廣し 同  
初恋の儲みと言はす誤診され 同  
もう処女でない診察え不安がり 同  
名医の診察ファン、とすみ 同  
診察の方より余技で名が賣れる 小松園

兼題「診察」

生々庵選

診察に背中灸の灸のわけを云い 春菓

兼題「待合室」

鮎美選

問診に家の秘密をさらけ出し 同  
ごうぞ誤診であつてほしいと母の怨 葎乃  
診てもろて家内に内所の薬瓶 生々庵  
待合室で泣く子走る乳吸ふ兒 同  
團体旗待合室もさがせる 葎乃  
ホームラン待合室は湧きあがる 恒明  
待合室トランク見張る下女ちゃん 葎乃  
夢破れたり待合室で棲み 豆秋  
小児科の待合室で寝てしまひ 小松園  
社則殿と待合室の壁に貼り 没食子  
口だけは達者眼科へ順を待ち 生々庵  
まちあいしつポルをながめてかられた 孝之  
待合室できけば先生こわいかほ 古方  
待合室こどもも話す税のこと 没食子  
待合室重患がきてははをとり 美秋  
待ぼうけ待合室は晝下り 梨里  
叱られるものを待合室で食べ 白柳子  
待合室十田札が踏れてる 苑女  
待合室で駅の心の花がゆれ 種美  
待合室我より不幸な話きく 栗々  
待合室置引と知らず話かけ 梅里  
待合室待つてゐるまに気が変り 鋭々  
待合室を総立ちさせて首相下車 齊花  
同病の待合室はよく喋り 梨里  
先生の趣味が待合室に見え 春菓  
山崎の待合室のランプの灯 野介  
日曜の待合室の紅椿 栗々  
待合室ピラに旅愁をふと感じ 苑女  
淡雪の如し待合室の窓 古方  
父親が手を合して待合室 里十九  
投薬の待合室は一人立ち 久米雄  
まへのうちのまへいかりさみろえ 孝之  
小児科の待合室で虹が見え 山雨楼  
待合室たまされさうに娘が座り 正司  
フラナガン神父うれしき待合室 鮎美



お馬鹿さんねエとキツスをくれるなり 廣島縣芳泉

明日のない淋しさもつと呑ませてよ 同

恋すべき人にあらねど心火燃ゆ 同

配給で貰った様な女房と居 同

引つかついで行くなら遣うこは嬉し 同

学者では喰つて行けなべんを取り 同

君だから話す家計の裏の裏 同

人が好いからだ女房口惜しがり 同

俺ならと言ふは後から云へること 今治市文庫

賣る方は由緒も金にする氣なり 同

三文も持たぬ安心グッズリ寝 同

人間も花も落つれば哀れなり 同

裏見れば博覧会は骨ばかり 同

斯う長壽だとは養嗣子予想せず 同

ビルの窓死は七階のすぐ下に 大阪市草々

逢ふ化粧朝日会館友の会 同

奉仕日の肉屋男も列に立ち 同

母ついに負けて車内で出す乳房 同

浅草で踊り父なき子を育て 同

長男大学入學 同

角帽に無学の父を言ひ聞かせ 小松市茶佛

理に負けた父ぼそくと寝てしま 同

どんな手を打つか社長の懐ろ手 同

身につかぬ模倣敗けてもなほこ 同

大の字になつて我家の煤けよう 同

唄になるなら心中しようかと思ひ 愛媛縣曉明

相談へ元老格の木綿 綿

論文はどうにかなると喫茶へ來 同

おや／＼廊下を校長さんも拭き 同

娘の腫騙すお人じやないという 同

煉炭が消えたで寝ようなあ女房 東京都東夢

ボス一人発言したゆえ決議され 同

童貞で死んだが通夜の話題なり 同

医学博士コップ酒とも申しかね 同

誤解する程には愛し合つてなし 大阪市葦丈子

女事務蕪みながらたより合ひ 同

大物と言はれ冷たい私生活 同

ひやかしもベルでデパート追出され 同

焼けた／＼と焼けぬ昔も裸なり 貝塚市千舟

会ひたいと書かず櫻が咲いてます 同

作業班別に彼女の花も植え 同

怒らせた良夫弁当持たず出る 同

ひどさんの空地へ夢をたてゝみる 岡山縣祝平

びんのわれ銭になること子に習い 同

こんな世でないこと知り／＼ボスに敗 同

えりあかを氣にして先の妻と会い 同

唇を許した位許しとき 和歌山宏方

人間の端役に生きて恙なく 同

十七でもう二号まで身を落し 同

指輪もうおむつを洗ふ手に邪魔な 同

注射する肘看護婦へ突きつける 岡山縣娛句樂

金詰りそつと借りたり借られたり 同

旅行先でも篤農家作意慾 同

女学生水商賣の母に似て 同

浮浪兒の眼にも春の山春の川 金沢市陽々

娘の好みその成長に驚ける 同

春雨の中を遠足まだ続き 同

落第でいゝと母親黙つて居 同

あらたまりこれから嫁の件に入る 同

諦めるなどご自分のことでもなく 同

共稼ぎふとん疊む日疊まぬ日 富山縣壽郎

肯定をして議論をば止めさす氣 同

健保ならこゝまでと言ふ齒科治療 同

妹のおごる話はお汁粉屋 同

マージャンはまだ起きる午前二時 岡山縣苑女

御不淨を借りて質素な家と知り 同

左手で又來る握手して別れ 同

灰皿よこんな女に誰がした 同

秘める事知らぬアプレの恋をさく 大阪市志津

科学にも頼りバイブルにもたより 同

公用の旅のついででの多すぎて 同

全快の喜び素足にくる疊 同

銅像が建つぞと金にならぬ役 大阪市葉光

恋愛結婚しなさいと母信じ切り 同

短軀童顔鬪志に燃えてよく笑ひ 同

心臓が弱くてなどごとく喋り 同

大原女ニュースカメラへ狩り出され 高槻市丁路

旅のつれづれ京の詛を筆にとめ 同

後から前から舞妓写される 同

同情が過ぎて税務署くびになり 同

我が過去の酒に淋しい味がする 同

終電の女視線を痛がらす 同

女なる自信が消えず未亡人 同

喜劇見て涙するなり斜陽我 同

世渡りのうまさ掌かえすなり 愛媛縣旭童

つまりその金もうけには金がいり 同

もう妻がこんなに伸びたあせる 同

ローマ字の拾ひ読みとは淋しいね 同

お隣は雨降る時に休む職 尼崎市ちか子

お隣りは集金人を又帰し 同



お隣りにある日座蒲團借りられる  
お隣のおやちがすきな佐渡おけさ  
当つたら妻に言ふ氣の宝くじ 和歌山桑南  
父臭いタオルと言つて親します  
買出しの頃の力を妻あきれ  
金がある隣の夜なべまだ止まず  
幾回となく本心聞くも女なり 東京都高志  
幸福の限界等とぬかしたり  
子が出来て理想は單に夢と知り  
結婚で解決すると又誘ひ  
嗜みあてた石へ過まる妻なりし 岡山縣夜潮  
謝恩室に招かれて

教へ兒が猪口で攻め立て酔ひ酔ひ  
級長が出すかくし藝エツサツサ  
長尻へ出す濁酒に恐縮し  
間借りして我慢の強い人となり 岡山縣牛歩  
得心のゆく迄妻に云わしとき  
熱海から戻りの汽車は処女でなし  
院長の胡麻塩髭をなつかしむ 倉敷市千代男  
花霞オールのこだま夢とさく  
待望の久し老妻浴衣縫ふ  
春柄といふ振袖のタイピスト 高知市笑草  
氣嫌なんかとつていらんと拗ませ  
似た仕種血は争へぬものど知り  
我辭に似た子を叱りふと淋し 今治市志津子  
今日も亦大根おろしの膳につき  
焼けもせず引揚もせず貧乏し  
仕立代これも夫と相談し 姫路市和水  
春近しうす笑ひしたボーズ撒り  
ライフ読む程に上達して見たし  
借金え自分の恥をみんな言ひ 岡山縣藤波  
カレンターたまにめくればうらやま  
愛故に暑さ寒さもない生活

あの頃一錢拾つて嬉しかつた 東京都万年  
数十名募集は麗人許りなり  
陳情の其の他大勢扉にあふれ  
愛情を金で買う氣か馬鹿にして 岡山縣朗笑  
一町は用在る如く家を出て  
自惚え合種うちてうら淋し  
師吾れを忘れたまわす寄附の文 大分縣表情  
看護婦も會計もして妻多弁  
婦人会継子のことで落選し  
砂利置場如きコンクリートの囲み 岡山縣富至  
胸のすく様な話にあつた嘘  
媚びる事忘れた様な許嫁  
もめぬいた当座宵寝をする夫 今治市醉歩  
旧姓で呼ばれあわてた町の角  
附添の方がうめいた手術室  
ブギウギで花火の様な恋もする 大阪草右  
初誕生正座は抱かれ乳を吸ひ  
養老の酒を訪ふ

料理屋の隅に本社のおはします  
亡き父の篤農振りを歎に見る 石川縣光郎  
媚びて見な拗ねても見なと倦怠期  
空爆の跡へ名もない花が咲き  
雑音が多いラヂオのベーターペン 大阪府きはち  
詩に生きる令女は婚期既に過ぎ  
エチケツトなき男なり魅力あり  
拾ふたと届けた記事に馬鹿野郎 高知縣十四郎  
叩き賣り安い〜が散つて行き  
珍客と言ふは昔の呑み仲間  
十円が金と想へる生活むき 吳市史球  
眼をこじて寄りそう君と生き抜かん  
鼻かんだ十円札が落ちてゐた  
櫻咲き春の目ざめを知る乳房 吳市紅兒  
拜むからなど上手な金を借り

小兒科の椅子母親の氣のつかれ  
ネクタイをひんにぎられて俗氣さ 宮崎市卯之助  
親は子にゆすられながら齡をとり  
それ見ると妻をたしなむ値が下り  
商賣の弱さ個性も殺るされる 高知市・微郎  
暴風雨の中を出る汽車還る汽車  
戦後派の流行らぬものに子 沢山  
競輪の御かげで妻に置き去られ 愛知縣北雷  
春の川若後家の素足白いこと  
漬物になり損つて花が咲き  
同僚の誠切妻はくどく聞き 岡山市忠美  
出もどりのミシンを踏むは嫁か氣で  
白い羽根鬨志も胸へかきやかせ  
五分間停車菜の花眞盛り 兵庫縣無聖  
深呼吸して打ち上げたタイピスト  
たゞ一度誘はれたゞけが式を挙げ  
自惚が強く恋愛はかどらず 滋賀縣文子  
誤解まだとけぬまんじ他所へ嫁き  
日記だけ書いて冷たく生きており  
忘れてたものに靖國神社あり 熊本縣月仙  
煙たさが一杯思ふ事はなし  
ボスターに事業不振は書いてない  
開店の前忙しきコンパクト 東京都蛙声  
「赤い靴」覗つゝ放出のガムを噛み  
安靜の窓暮れやらす夏時間  
おろかなる夫婦になりぬ倦怠期 宇都市金路郎  
満員車我が子の爲に出る力  
ほろ酔に過去の街の灯るるんでる  
アベツクを見て居たら課長言ひ 兒島市鴻峯  
甘党に祭り上げられ損ばかり  
生活苦女房が先に顔に出し  
キヤパレーの裏焼跡である都会 豊中市直郎  
街録に女だとても負けてゐず



持つてないのが先に出る喫茶店 同  
 虎の子はすつたが次点にもならず 岡山縣露外  
 誤解されたをきつかけに再縁し 同  
 未亡人選挙に貢ぐ金も持ち 同  
 片袖を濡らしてつゝじの雨を行き 佐賀縣えいを  
 又会ふ夜などと夢にも思ふまい 同  
 結婚解消  
 氣安さの一人になつた爪を切り 同  
 生きてゐた夫は愛を否定する 大阪市弧舟  
 ねぎ一束下げて鰥と云ふ姿 同  
 感状を紙屑籠へホイと捨て 同  
 降職へ今更意地を捨て居る 長野縣柳兒  
 そくささどめ行商むつと去り 同  
 苦勞性その頑健に耐えて居る 同  
 商賣を棄へて古巢へ賣りに来る 今治市バット  
 今治市制三十周年祝賀会  
 高虎の堀を埋めて家を建て 同  
 祝賀会あんな男が功勞者 同  
 倦怠期恋愛白書を書き綴り 岡山縣十九平  
 隨行の方が役人面をして 同  
 入学式寄附の趣意書が配られる 同  
 尾ぐらいで済めどトカゲ置いて逃げ 貝塚市庸司  
 遠慮なく膝が組めるも古疊 同  
 トラックは豚の悲鳴を乗せてゆき 同  
 復職へ部下の指図を受けに行く 大牟田風浪  
 アベツクの花見は花のない所 同  
 雨が要る要らぬと百姓勝手過ぎ 岡山縣一路文メ貫  
 名物がいたみかかつた旅婦り 同  
 美男子の脈を看護婦と直し 三原市正一  
 月給で買へば背廣はズボン丈け 同  
 楽しんでゐる遠足を妻あんじ 高知市桂夢  
 未亡人泣いて観て来て一人寝る 同  
 どんぞこに模様違ふ皿二ツ 愛媛縣孤峰

これまでに育てましたよ入学日 同  
 靴下の宣傳脚の募集やり 大阪市葉菜子  
 ニールック腰の細さを強く見せ 同  
 火魔しきり積木細工の國にして 大阪市司郎  
 投げキッスダグウッド出勤間にあや 同  
 肘鉄をエプリアルフルにしてしまひ 布哇純香  
 未亡人エプリアルフルで隙を見せ 同  
 東大へ行く貯金とは殊勝な子 愛知縣吐平  
 履歴書の必要もなくドブ浚え 同  
 災難を待つてでなしひまな医者 尼崎市紅山  
 ストロローをつたうあまさも恋の味 同  
 貧弱な矢車草が花をつけ 岡山縣梯梧  
 ゴシツブを撒きに男がやつて来た 同  
 宴会は済んだが我家通り抜け 愛知縣夢佛  
 氣の毒さ一日中傘さげて 同  
 サンマータイムかど時間の念ををし 岡山縣至孝  
 成る程と言つて又見る遠目鏡 同  
 先んずる意氣え夜学の椅子固く 横濱市智水  
 ゆく春へ働くものゝシャツの穴 同  
 恋なんかフンと笑ひ窓ガラス 滋賀縣斗志  
 無い人は恋に走るをひまど見る 同  
 散る花を弔ふ如く鐘は鳴り 鳴門市五厘棒  
 團參へ癡人の眼がするどすぎ 同  
 公金横領噫公僕にある死角 八代市実信  
 自惚れが差伸べさした後家の膝 同  
 二号もつて息子の嫁に意見せず 岡山縣美能留  
 御佛になりきつてゐる被告席 同  
 横槍が入り復職それつきり 鳥取市秋男  
 無能なる父とも知らず子は生れ 同  
 食事情よくて妻の里遠くなり 大阪市芳人  
 食事情悪くても妻の里遠くなり 同  
 言訳は帳簿ばかりをくりひろげ 岡山縣北路  
 夕食へまだ失業と言ひ兼ねる 同

差押へさして商人もうけてる 出雲市まさる  
 虫にさえ優しくなつて十八九 同  
 汽車が出て淋しい心春の宵 岡山縣加代  
 渡舟守アベツクだけに舟を出し 同  
 抱負あるかごろりと横にちて笑み 今治市青雨  
 街録へ日頃のうつふん出したまで 同  
 婦還した父さん写真とは違ひ 今治市松花  
 先づお茶の指南をします未亡人 同  
 マイナスかプラスかダンス習つさき 岡山縣拓志  
 見解の相違と税吏軽く逃げ 同  
 ダイヂエスト読む人もありパスにゆれ 岡山縣光江  
 ハイキングいつか一組づつになり 同  
 将棋だけ出来て社長に見こまれる 滋賀縣季贊  
 寺參り用心棒に孫を連れ 廣島縣スミ子  
 白飯温泉慰安旅行  
 酒を呑む女中みんなにもてゝをり 兵庫縣指月  
 傘の恋一緒に帰るチャンスあり 布施市柏葉  
 良くはずむピンポン球に似た少女 熊本縣鶴堂  
 メリヤスを着てから妻は老けてゆき 大阪府恵風  
 眞直に実印押して掴む藁 熊本府無六  
 平凡に暮し子供が五人あり 鳥取縣夕路  
 すべからく座れば既得権をもち 香川縣迷瀨子  
 はのぼのとするよう美談に聞きはれて 倉敷市日出雄  
 振り向けば涙の過去がよみがえる 岡山縣千富彌  
 十二貫五百のまゝに半ズボン 大阪府恒良  
 新緑に抱かれてポツリ山の家 大阪府露草  
 俄雨泣き度いやうな春蚕なり 出雲市へとち  
 野良婦りポリスに惜しい歌と合ひ 熊本府安彦  
 令名を慕ふて来れば只の人 今治市一風  
 チョットした仕草も美人なれはこゝ 今治市眞歩  
 燕来た来た私には職の無い生活 大阪府柳亭  
 競輪へ行けずパチンコ屋で済まし 新潟縣不味  
 食事情鶏にも妻が廻り出し 岡山縣中山子



詠史川柳

# につつぽん

戸田古方

## 原始社會

### (一) マンモス

一万年位前に日本は大陸からわかれて島國となつたといわれている。そのことはかつて日本の土から出た大陸の巨象マンモスの骨などで証明される。

マンモスは童画の方がほんとし  
マンモスのことにもふれる地質學  
マンモスは王者の如く死に絶える

### (二) 列舟と筏

人間がこの島に住む様になつたのはすつと後でせいぜい七八千年をさかのぼることが出来ない。後に生産にしながら南からの人は列舟で、後に政治の中心になつた北からの人は筏にのつて流れついたりといわれている。

列舟になりそうな木を叩いてみ

する  
指もれる水がためたい石清水  
起重機が大きな象をつり上げ

### (五) 石器

一番はじめの道具は木だといわれているが、そんなものはのこつていない。石の道具も荒削りの旧石器から磨きのかつた新石器に進歩していった。日本に残つているのは主として後者である。

### (六) 火

もつと堅い石をこんよう搜して來  
石器時代石の堅さも心得て  
ことばごとも人間が人間らしくなつたのに火の利用がある。自然の火におそれ、それを自分のものにして人工の火を發明した。火を洞穴の奥深く守りつづけたのは婦人であつた。火を神性視し、婦人は火の神の奉仕者として尊敬された。

### (七) 土器

偶然の機会に火にあつた土のかたくなつていることを發見して土器をつくるようになった。縄紋式の古いものから彌生式、ついで祝部式と今日のカワラケの様なものへ進んでくる。

火の神を産んで女神はみまかりぬ  
偶然の機会に火にあつた土のかたくなつていることを發見して土器をつくるようになった。縄紋式の古いものから彌生式、ついで祝部式と今日のカワラケの様なものへ進んでくる。

焼き上げてあつちこつちにある指紋  
試作したロクロで土器を試作する

### (八) 原始共産體

唯物史觀の人たちはこの時代があつたといひ古典派の人たちははつきりあつたといひはないが、生産の力が極度に低い状態を考へたらなかつたといふべきでない。

### (九) 姪産制

女王アマテラスに補佐役である弟のスサノオのいたことが神話に記してあるが、愛を原理として力がこれを補う。これが最も古い政治形態の様

である。女ならではの夜のあけぬ世界、母系時代のことであ

### (十) 神と人

しめ出してから姉さんは涙ぐみ  
家の子に今日姪産をおがませる  
(家の子に叔母のこと)

### (十一) 神と人

科学的なもの、考え方の出來なかつた大昔、汎神論、シャーマニズムの起つたのはあたりまえ、神に祈りつあらまほしきことを願ひ、あらまほしからざることをさげんと願う。

勘當のまゝ、神さまになりはつた  
人間のことばで神へ呼びかけ  
神さまも神の身内もみな敗れる

麻生路郎著 水武書房版



好評噴々

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書  
本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して教むところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを會得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。致で一読を薦む。

B6版 二二二頁 定價 一〇〇円 送料 金十二円  
取次御注文は 大阪市住吉區西五丁目二五番地 川柳雜誌社  
一冊 日版 大阪 七五〇



# 川柳の進化

福田山雨樓

四季の変遷をはじめ、世の中には多くの変化がある。移り変わり、流行現象はめまぐるしいほどである。しかし進化と云うものは徐々に来てあまり表面的でないために一寸眼に通かない場合が多い。猿から人間に通化した過程には何万年かの時間的距離がある。

川柳にもその作風、主題、傾向、論調等幾多の変化があつた。遺著家も次から次へと出た。けれども進化は仲々表われて来ない。一時あれほどやかましく叫ばれた革新川柳も五八の他界を契機として一人去り二人消え、尻切れとんぼに終つた。革新川柳は童頭蛇尾の感はあるが、その進歩的批判的態度、前衛的求真的熱意は尊敬すべきものがあった。川柳の前進に何程かの貢献を齎したことは劍花坊はじめ幾多先驅者の靈に感謝を捧げねばならぬ。

川柳も他の文学作品と同様、娯樂性、教化性、藝術性の三要素が要求されるが、その一方に偏することなく三者併行して句境が拡充深化されるところ、質的の進化があり、ひいては川柳が人間陶冶の詩となり社会淨化にも役立つに至るのである。

柳化などは川柳の進化を意味するものではなく、スランプやマンネリズムを打開する刺激的な試みである場合が多い。これに反して川柳の體裁は句の世界進出を意図する点から量的な進化に資するものと云うことができよう。體裁可能な限界には尙問題が残されているが運動を積極化、組織化する必要がある。

## むかしの夢香君

安川久留美

リーダーズ・ダイジェストの日本版編輯長たる鈴木文史郎氏が「文藝春秋」五月号に「漫画は世界の言葉」と題す一文のうちにおいてある。戦前アサヒグラフ（週間）誌の幹事で海外版に日本漫画を普及した「羽田三吉」というのが、金沢人で、六華会第一回に出席した男である。彼は当時ペンネームを「夢香」として、小品文や俳諧まで作つたものである。金商時代英語を得意とした関係で外国語学校に学び、朝日新聞社に入つたことは風の便り耳にしていた。今日この政治漫画に興味をもつというからには、恐らく川柳にも多少の心構えはあらう？ 金沢の卯辰山が一名向山ともいい、それを夢香山ともよびさせたのも彼の雅号からであることと忘れないうであらう。私より三ツ年前上だから既う還

唇の管、彼が二十一歳の時は川柳も作り、冠句も作つた。然し六華会の第二回を兼六園に催した時彼は出席しなかつた。私はよく彼を梅本町の居に訪れた時いつも小品文の作つたのを見せた。たしかにその頃から文才はあつた。作は石田芳茶庵と私とが編輯発行した「小品文集」にいくつも載つてゐる。但し私の発行した「俳諧正調」に彼の二十六字の體ツばいものがあつた。

軒に紅屋のともし灯ぬれて  
雨に思案の糸柳

なぞその一つである。ペン字のきれいにかく人だつた。とに角日本の漫画を世界の隅々知らせやうとする彼れがもつた金沢にあらば、川柳にも思案な研究をしてほしがつたと思はれてならない。

（附記）六華会は最初北國新聞社の銀波橋氏を師として明治四十三年四月三日に誕生した。川柳六華会の前身である。五月十四日記

## 漢語

戸田古方

耳からだけきく時、私たちの言葉は大へんきゆうくつになる。ところが世の中の人とは思つたよりこのことを考へていないようだ。「ドジョウ」といつている農學者の言葉をしまいで「土壌」とはとらず「土」とばかり考へていたとは笑えぬ話である。街のさわがしい客引のマイクが「テンポ」とか「ハンバイ」とかがつてゐるのをきく。それでなくともいらいらするのには、この堅

い言葉をツツまけさまにいわれたのではよけいに救われぬ。せめて「ミセ」とか「オウリ」でいますぐらいいえぬものか。  
ラジオのアナウンサーは一番よい、わかりやすい言葉をつかうようにつとめてゐるが、それでもどうかすると「ドジョウ」や「テンポ」になりにかぬ。

法律語のような学問のことばにはそれぞれきまつた意味があつて、そうそうわかりやすい言葉ばかりもつかまえないが、多少しくどき方が出来そうだ。

「右側通行」より「右側を歩きましょう」の方がまちがいのない歩いかつい言葉は人々をとげとげしくさせる。

川柳をつくる人たちは耳へきかせることが多い。こうしたよくせをつけるように人々にすゝめるにはもつてこである。いいふるされたことながら、誰かゞどこからか始めないかぎり、あらたまらない。  
漢字の数ががざられ、よんどころなく平仮名で「えいきよう」などかいたのは見苦しい。又ローマ字をひろめる上にも深いかゝわりがある。  
出来るかぎりくだけた言葉でかいてみた。

## 小さな生活

山本葉光

諦めて小さい慾を持ちつゞけ  
葉光  
痛みが強いとそれさえ治ればと

## 不朽洞

▼土田梨光氏（奈良縣）は路郎主幹の句碑一名も知らぬ山の起伏をうれしがりに字陪郡三本松村向淵に建

てられることになり既に彫刻も出来たので近く路郎夫妻を迎えて建設することとなつた。除幕式祝賀句会は不朽洞句会を招いて農閑期の八月下旬の夕刻から翌十三日へかけて開催するとのこと、全国各地の會員の出席を歓迎されている▼村田流水氏（ハワイ）は四月下旬訪日、東都に滞在、五月十四日の大阪道徳病院主催の有馬温泉吟行に参加され、六月十日に海外川柳句集の句稿を携えて再度大阪路郎主幹に選を依頼され即日京都へ向はれた▼雨を語る座談会が六月五日夜、中島小児診療院の樓上で開催され、路郎、葦乃、生々庵、結美、豆秋、方眠の諸氏と筆記者として梨里さんが出席▼浪玲之介氏（大阪府）は昨年来健康を害されていたが、最近快癒、新しい会社の重役として再起された。▼富士野鞍馬氏（清水市）は全國浴場新聞十六号に「江戸川柳に見入込湯」を執筆▼直原七面山、黒田榮楽（岡山縣）の両氏は六月三日の本社主催の柳秀忌に出席され翌四日は川雅貴生川支部に美秋氏を訪問柳談された。▼種瓜平氏（大阪府）の次女百枝さんが結婚性関係炎で病臥されている一日も早く快癒を祈る▼橋本線雨氏（大阪府）の母堂が五月廿五日に郷里石川縣で永眠された行年八十七歳謹悼。線雨氏は同夜十時五十分大阪發で郷里へ向はれた▼河村日濤子氏（鳥取市）は五月廿六日に川雅日の丸句会を田中氏邸で開催され日の丸自動車の前社長田中氏の追悼号を出された▼宮田不二氏は

諦めた管の窓が出る。食慾がなくなる  
と腹さえ減つて来たらしいと  
思ひ禁煙をする。

小さい慾に対してはすぐ諦める  
心が持てるようになって欲しい。  
それは信仰のお願でもなく、  
それも又樂しからずやと思へる柳  
魂とても言ふものが、いつのほど  
にかさせて呉れるようになってしま  
つた。  
歩行が不自由なので、雨でも降

### 病院

#### 中島生々庵選

病院に死にそこないは小さくある	葦丈子
病院で娘は過去を処分する	同
真門は悲し院長も出て送り	鉄兒
病院の匂ひを持つて子が戻り	同
軽患で肩身を狭く外科に待ち	忠実
スリツパの香開き分れる程に病み	實花
催促にさすが病院までは来ず	千舟
病院の廊下になじまぬ靴の紙	正一
落花かぬ母へ手術の朝となり	同
死を見つむ其の聲に病舎暮れ	智水
入院と決まり預金も調べて見	同
退院へ妻の嬉しい薄化粧	同
退院の日病室もなつかしく	同
病院の窓純潔のまゝ終り	如川
退院の友の握手へ力込め	純香
薬石効なく真門から出され	牛歩
	芳泉



### 課題吟

号泣の声病院の夜は更け	直郎
退院へ最少し居たいと思ひ	婁句樂
花束で病院へ行く日が晝き	愛鳩
入院をさせホットする生さぬ仲	へとち
病院で死なせとらない子の氣持	春柳
病院の廊下へ暖の響く夜	夏六
病院のベットで涙線を見る	実信
病院へ花束顔は見せず去に	苑女
味氣無く病院の傍雨をきき	金治郎
病院の窓を見上げて母は去に	陽々
産声は病院の窓つき抜けて	同
回診へ頼み切つたる胸を開け	えいを
退院の日が近づいたハーモニカ	月仙
入院は長し看護婦の窓を知り	粗影
病院の夫意外に素直なり	茶々
退院の日美男になつてあり	淵年
病院へ母を負つた肩の巾	淑郎
院長の趣味がたゞよう控室	安彦
病院の朝ある丈けの窓を開け	正則
病院を出ればこんな重い靴	同

ると、月に一回の外出の句会へも  
連れて行つて貰えぬ。  
小遣ひが稼げぬと川柳誌も郵便  
代も煙草代もないが、食べさせて  
貰つてゐる兄に対して、小遣ひを  
呉れとも言えず諦めるほかない。  
自分ながら、慾のない毎日だと  
思つてゐるが、それでもラジオは  
十一時まで聴かなければ眠る氣に  
なれず、誰かと貸して呉れる雑誌  
や書籍なら、小説であるうと何ん

でも読んで一時が二時になつても  
読みふかす慾がある。それだから  
朝寝がしたくて、母が起して呉れ  
れば晝迄でも夢を見つどけて眠つ  
てゐたい。  
起ると新聞を隅まで読んで、ラ  
ジオは何んでもかんでも聞いて見  
る。雑用があれば無理をして迄、  
それを続ける慾もなく、すぐ諦め  
てしまひ、頼まれた薪割りも、研  
ぎ屋の眞似もする。時計の修理が

あれば熱中もするし、締切りが近  
ければ句も創る。煙草も喫ふが、  
何んの爲めに生きてゐるのか、自  
分でもその樂しみが無いのか、ある  
のか、解らなくなる事もある。  
然し小さいながら衣食住にも慾  
は無いでもないから、室クジも一  
枚は買えろと買ふ。無理のない自  
由は、こんな小さな生活の中で、  
川柳を樂しんでゐる

入院の心に添ふて雨の音	孤峰
春うらゝ脳病院の鉄の柵	正司
回診の緊張をした眼にすがり	山雨樓
脳病院春を頻りに歌つてゐる	十九平
院長と云ふ肩書が診て回り	十四郎
病院のベットに家出て生きてゐた	同
退院が出来ず附添へ優しくし	一路
退院の日に看護婦は泣いて呉れ	梢風
病院を持たず話へ入舞し	七面山
病院で情死まぶしくよみ返り	葉光
退院が近く生活をあんち出し	同
看護婦がにっこり笑ふ平熱日	酔歩
代診は廊下に馴れて夜を更し	鮎美
病院の生死の窓が明るすぎ	同
憂愁にとちこめられてゐる個室	芦穂
病院で恩返しするブラン立	葉光
病院をくまなく歩く試歩の杖	醉步
佳・病院の櫻へ白衣背負つて来	正則
佳・信じ切り病院の妻よく眠り	加代
人・入院の夜人情の有難味	山雨樓
地・入院の荷が落ち付いてお茶を入	千舟
天・退院と聞いて無沙汰がかけつけ	藤波

東京都中野区淀町九番地へ「移轉  
され」省線は東中野と云ふ「新居」  
の句を寄せられた▼藤田わたる氏  
は大阪府北河内郡座間町八南四五  
へ「転居された」▼木下剛王氏令息が  
五月廿八日午後一時に永眠された  
謹んで悼む▼木村孤浪氏は六月も  
り、維持委員会から特別会員に推薦

### 川 案内

六号活字十四字詰三行  
金百円(但し前金切  
手代用可)  
改訂・移轉・句會案内  
袖書願告、その他

せんりゆのおと(川柳入門手引)  
川柳指導に最適 六册計共百円  
全治市神明町 長野文庫

川雜旧号 残部ありますが、希望  
の方は号数を往復ハガキで問  
合されたし 本社

「食」の句を募る  
大阪市南区難波新地四番丁  
北極星文化部「食文化」編輯部

ピヤホール  
みどり  
上六交又点角西北

富強化材料客者には当然!

マキアの……

## 黒硝子

大阪硝子工業株式會社  
山崎硝子工業株式會社  
電話 南四四七番



投稿清規  
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社五月例会 (大阪)

六日 午後六時  
於 大空文化会館

六時ではまだ明るいので定刻には殆んど揃つたのを見てもその熱心ぶりが思はれる。岡山縣の弓削から、不朽洞会員の福鳥鉄児氏が出席されたのもうれいことの一つ。路郎主幹は柳語に最近の旅の話をとり入れて話された。今月の不朽洞賞杯は蟬々氏が獲得、拍手裡に受賞された。(幹事記)

出席者 路郎・古方・愛蘭・哲水・芹穂・正司・蝸牛・鬮骨・柳清・銀人・修三・草々・春草・豆秋・火泥・生々庵・三司・鉄児・蟬々・怒留八・種美・万樂・烏莊・小松園・春菓・藤彦・晴峯・白柳子・花村・亞鈍・野介・芳人・翠光・瓜平・霞乃・梨里

兼題「感謝料」 麻生路郎選

感謝料は礼も言わずに印を捺し 鳥峯  
事務所に秘書感謝料の高をきめ 鳥峯  
感謝料を第二の男からもとり 豆秋  
惚れてゐる弱味感謝料ようこそ 笑泉  
本心でない感謝料を支持はれ 翠光  
感謝料でもう今日からは他人です 晴峯  
感謝料と養育料で家が建ち 白柳子  
感謝料となれば母親負けであす 瓜平  
脱税の金で感謝料拂つとき 美秋  
感謝料をとつてサツサと嫁はじ 春己  
感謝料がとれて淋しい日が続き 花村  
産褥に感謝料だけが届けられ 小松園  
感謝料を税務署なりに値切つて来

小切手の感謝料二ツにひつまらぬ  
感謝料のゆるる迄内職続けて居  
感謝料をめぐり冷たい冠木門  
感謝料の月賦と言うがおかしくて  
兼題「ネオン」 菊沢小松園選

團体はネオンの下で待ち合せ  
ブラカードうつるネオンに消息し  
ネオン消え道頓堀の下駄の音  
失恋をしたのにネオンまださそひ  
家出した娘とめぐり合うネオンの灯  
ネオンの灯消えて旅愁を取り戻し  
戎橋ネオンの消えた待ち呆け  
貨ボートネオンのうつる水をかけ  
一販を發つ日ネオンの灯がきれいに  
二階から遠くネオンの灯が恋し  
景氣よいネオンの下の金詰り  
勘定ときはネオンもまぶすす  
いきものようなネオンに吸ひ込まれ  
ネオン皆負けまいとする光りよう  
アベツカのボートはネオンに色さら  
車窓からネオンにびんぞろさまり  
残業の窓にネオンの美しい  
駅前夜の霧ネオンの妖婦めき  
ネオンの灯子をもつ女とも見え  
ネオンの灯ついで今宵の眉を引く  
なきがらのようなネオンの朝さなり  
大望をネオンに軽くあしらわれ  
満月にネオンの裏を見すかされ  
キツチリネオンを眺んで通り過ぎ  
偷落の顔を見なすネオンの灯  
儲けたら来いネオンが呼びかける  
儲ければならぬ嘘なりネオンの灯

「ニセ物」 上田翠光選  
本ものを忘れてみんなひつかかり  
サーピスのよきニセ物をはらさる  
偽物もあると偽物掴まされ  
贋物に父祖傳來の怨を知り  
ニセ物を家宝と信じて慈がなし  
ニセ物はニセ物にして相場たち  
あぶく銭儲けニセ物掴まされ  
感心をしつゝ箱書断られ  
首かさり若さに似合ふ摸擬眞珠

柳清  
一路  
美路  
種美  
路郎  
無名林  
正司  
怒留八  
葉光  
七面山  
亞鈍  
鉄児  
丸樂  
へん骨  
笑泉  
生々庵  
銀人  
瓜平  
満年  
晴峯  
怒留八  
翠光  
笑泉  
瓜平  
翠光  
春菓  
春菓  
瓜平  
春菓  
満年  
鳥峯  
烏莊  
満年  
春菓  
春菓  
小松園  
光選  
古方  
七面山  
修三  
正司  
亞鈍  
蟬々  
同  
笑泉

にせ物と知らぬ自慢へ癪を立て  
アパートで暮す天皇さんもあり  
税金の通知にせいでわらないやるか  
千四のにせにかゝわりなく働き  
ニセ物と迷込み宿は知つてゐる  
ニセ物でもないわ貴方が呉れるを  
純毛といふ洋服の皺がより  
ニセ医者の方が話も面白  
大親の眼にもにせ物よく画かれ  
贋物を知りつゝ買った古い義理  
千四札失礼をしてすかして見

兼題「大寫し」 高鷲亞鈍選

雄大な鼻が息する大寫し  
大寫しに菌の繁殖逞しく  
接吻の音も大きい大寫し  
時代劇金歯が見える大寫し  
大寫し鼻がふくれたようになり  
大寫し総理のバイブ太い奴  
消息がどこかで洩れる大寫し  
鏡台で残りのひげを探すなり  
視察をゲツとにらんだ大寫し  
古橋の力泳画面いつばいに  
プロフィールまつ毛の動く大寫し  
死顔が大寫しに出ると犯罪者  
恋しさが空一ぱいに描かせる  
五六本風に吹かれた大寫し  
銃口に飛びこめそうな大寫し  
キツツの場大寫ししてジ・エンド

席題「立読み」 須崎豆秋選  
ジヨロの水立読み知らん顔で読み  
立読みへ店主油断のない視線  
立読みを肩たかかれた久し振  
立読みを押のけて出る包み紙  
立読みをの肘をくぐり買う雑誌  
二冊目の立読み雨はまだ止まず  
立読みを定價をみるは買ふ氣也  
立読みは少し背中を曲げて読み  
立読みは目録を見て定價見て  
立読みに馴れて眼鏡をかけ直し  
立読みを龍か蕙が覗いてる  
逢妻の立読み店主知らぬ顔  
何か読み乍ら柳の下で待ち

生々庵  
豆秋  
藤彦  
葉光  
晴峯  
へん骨  
丸樂  
満年  
春菓  
春菓  
瓜平  
正司  
白柳子  
怒留八  
柳清  
晴峯  
瓜平  
翠光  
鳥峯  
烏莊  
満年  
春菓  
春菓  
小松園  
亞鈍  
豆秋

席題「尋ね人」 北川春菓選  
尋ね人我家は無事な灯をかこみ  
尋ね人その頃二人温泉につかり  
飄然と見つ出される尋ね人  
尋ね人母急病を添えて書き  
唐獅子足を結んだ尋ね人  
尋ね人白痴のことも書き添えて  
尋ね人同じ町から名乗り出て  
スペーカー尋ねる人の上で鳴り  
轉落を知るや知らずや尋ね人  
下駄はきのまゝですと言ふ尋ね人  
親友が何んにもいはぬ尋ね人  
貧乏丈け我つて戻る尋ね人  
尋ね人ピラを過ぎればもう忘れ  
土を忌む長男にして保護願  
日本は狭くて廣い尋ね人

川櫻の會 (生駒吟行)

四月十七日 於吉田居  
上六年前十時集、奈良方面へ三十万から出たと云はれる人波にもまはれての吟行。生駒の吉田居で句会を開催。午後三時閉会。それから有志の懇談会に移り、盃を手にして午後八時に及んだ。

出席者 路郎・一步・霞乃・生々庵・里十九・瓜平・寒句・ひろすけ・春己・芳人・正則・文蝶・由布・春柳・梧橋・銀人・古方・豆秋・亞鈍・野介・三波子・小松園・栗・花村・恒良

兼題「櫻」 麻生路郎選  
商用の櫻ちらりとみて通り 恒良  
満開で別れて遣花で又出逢ひ 里十九  
櫻散る伊勢路を廻る旅役者 小松園  
肩組んで上役もなし櫻狩り 正則  
花の下親が生きてたらなとおもひ 小松園  
出開張櫻のある処上つて行き 花村  
葉櫻にまた／＼人はつきめなり 里十九  
新開のきのへさくら散りかき 小松園  
満開の櫻の下で待呆け 同  
職員は今日も櫻をうるさがり 文蝶  
櫻々動物園で子と遊ぶ 同  
カーテンの白き櫻は七分咲 同



凡人も和尙も酔うていゝ櫻  
ワシントンノ櫻も同じ時に咲き  
つゝましく谷間の櫻散りおくれ  
聖天の櫻の花にせん香の香  
花吹雪背にうけ犬の帶つて来  
吉野山櫻の下で八卦たて  
巡礼の憩む櫻の花吹雪  
櫻の枝折るは折つたが邪虎になり  
給料は運配櫻は散りかゝり  
疲弊した里とも見えず櫻咲く  
物干へ出て櫻見をせしめる氣  
留守番の好きな母あり櫻咲く  
文化村のよきノ櫻咲きは咲き  
冷戦の次ぎアメリカの花便り  
造花ではないぞと櫻派手に散り  
れぱりのなれさる櫻の花に似て  
列軍事故櫻を持つた子が憐れ  
負けたとて朝日に匂ふ山櫻  
労資対立のまゝさくらく散り  
櫻咲く奈良の都の折の折から  
夕櫻こゝが終ひの法界屋  
櫻はごうでもよいのなり外へ連れなかり

兼題 酒一 中島生々庵選  
税務署を喜ばすんぞ管を巻き  
いつの頃か家でのむ酒うまくなり  
先輩の意見歪冷たまゝ  
よう滞れたなと思ふはごに酔ひ  
はじ酒も三軒目の足に酔ひ  
父の酒知つてる子供遠く居る  
薄化粧してから妻は酌をする  
下戸一人ます天井へ腹を向け  
忘れもの届いて呑んだ順か知れ  
酒で死ねば満足に御座候  
一合が社長へ迫る語氣となり  
仲直り法被の方は酌ぎこぼし  
のむよしのまるくおし酒の友  
もう呑まんとおもひけり朝ほ  
ひとり酌む一合遠く三味の香  
酒ぐせを知つておかひは素直なり  
飲んで来たらしい夫のちと吃り  
一本の酒分け合ふて共葎ぎ  
小松園

一ぱい呑めぬ女房と五十年  
独酌の味人生が判りかけ  
女房に素直になる日二日酔  
千代かけた覚悟の酒を紅でうけ

兼題 「見合」 須崎豆秋選  
見合とはなんもかか御茶を呑み  
見るとこを見て二枚目の見合なり  
お見合の印象太い指だつた  
見合にはもう慣れ切つてたが立ち  
見合OKそれから揉める家同志  
見合の付添ひお天氣許りよめ  
鼻柱つんと見合の眼をばじき  
三度目の見合で黒子まで見抜き  
見合した夜の夢さきい富士熱海  
一生をかけた見合の顔ができ  
若禿がいつそ無情で見合をし  
潤員に踏まれたと見合する  
着こなせぬキモノ見合のあられなり  
見合馴れて、ホケロも見逃さ  
靴下の穴を見合で見て戻り  
何度目の見合が娘落着いて  
見合した印象鼻の頭だけ  
お見合のほんとお茶のどいこ  
おぼつちやんだわと見合した所感  
表むきは生理休暇で見合する  
席題 一日雑感 戸田古方選  
酒臭い息でおみくじあげてゐる  
押されてのこもつち花見客  
日曜の生駒の晝もご自慢  
淵員電車嬉しくもまれの駅  
いつ果てるともな列で切符買ひ  
開け切つた風へ倒れた紙コップ  
月参り花の出入に押し込まれ  
子供連れ早よりのらんさあきん  
子供連れだかわかる手つて巡査抱き  
押す方も押される方も酔つて居る  
大水の様に遠足乗つて来る  
半分は家から飲んで花見酒  
これが花見一家眷属押しもまれ  
三味線も鳴つて生駒の小路抜け  
石畳踏むで生駒の小路抜け  
乗り遅れ同士映画にすると決め

ものほしてせめて四月の風によれ  
上六のほこりに負けぬ一張羅  
野方

兼題 大阪南支部句會(大阪)  
五月廿日 於王子神社  
抵抗・焰・浴衣・鼻・顔役  
抵抗の抵抗もなく愛慾の唇がぶき  
ほんの抵抗もその裏がゆれて  
うつむいて黙つて開いてらなつか  
纖手よく最後の線を譲り切り  
レチスタンス一斉に起つ地下の旗  
抵抗のあと雑草のむしをら  
鼠捕り鼠最後の抵抗し  
愛慾に抵抗し純潔持ちつしけ  
煙突のすつべんから抵抗し  
啞になりつんばになつて抵抗し  
抵抗の構えで蟹は逃げまわり  
抵抗を十字架にした愛の人  
独身でガスの焰を派手に出し  
遺児あれぞある夜の焰断ちきれ  
いかけ屋の焰見うづる二三  
悪毒く胸の焰がうづる二三  
新聞の焰メラくあつけなし  
千年の壁画と眉心得す  
病むからに瓦斯の焰にのるお粥  
人妻を恋ふ身の焰もあま  
行者いきなり焰の中へあるきなし  
ローソクの焰で妖怪めいた影  
南海の藻屑になつてはる焰  
三角になつてははつれ合ひ  
季節はすれにスター浴衣を着せられる  
肩上げをおろして浴衣着に着せる  
湯の街の浴衣犯人とは見えす  
亡妻にだん／＼似て来る娘の浴衣  
えり足は宿のゆかたにかくさせて  
浴衣まだ戦後の膚に落つたす  
玄人の浴衣が素足をまつた  
貸浴衣同士でくぐる繩のれん  
コンバクトごうたすいも低い鼻  
み佛の鼻がかけて、鼻とけれ  
銅像の鼻の穴から蜂が出た  
鼻の輪にイヤ／＼牛は田を耕し

鼻柱だけで戦後派生きて行き  
鼻一つ馬券思はず握りしめ  
不細工な鼻と思へど膝まくら  
親の鼻の鼻金魚がゆれている  
その鼻へ争議要請ともなり  
P.T.A.鼻さんなか／＼お顔なり  
顔役が市長に会い釣りにく  
顔役の顔役つちり釣もとり  
顔役に出会ひ警棒露地にそれ  
顔役の胸のあたりに女投げ  
顔役の口にわきびがきゝすぎた  
事もあらずあんな娘がボスに惚れ  
顔役の咳阿は江戸つ子弁でよし

下關支部句會(下關)  
四月廿五日 於下関鉄道職員集会所  
平・家・蟹・二枚舌・耳・珍客  
貫うとき丈は平等の権利で来  
よく産めば鏡も平和な日が続き  
嚴格な父一生を平巡査  
平等な権利は成らず孕みたり  
平凡に暮らして明日の夢も見す  
家あれば柳ありけり水の里  
家主又家賃あげたい顔で来る  
家も名も捨てた新聞記事の恋  
政界を牛耳つている二号郎  
ここからは家主が違ふ家の向き  
人よりも家が大事にされたが  
家柄といはれ和服をすてきたらす  
半休門

### 版写騰田阪

二五町田芝区北市阪大

### 会商田阪 株式會社

番一九九五 島一 語五  
番一四 番一 番六



川下閣支部大柳川部支閣下川

家に居る時は素直な娘で居  
捨てらぬ家財の中に座り居り  
未亡人と言ふ名を捨て、家を出る  
家のない人もあらうに避暑避寒  
蟹籠を開けさん付けに妻を呼ぶ  
窮余の一策蟹は鉄を置いて去り  
時價々と言つた軸には蟹二ツ  
蟹怒り或日の議員さんに似る  
蟹の泡今日夕日をまた残り  
二枚舌これも出世の道ときめ  
盛り場をボクサーくすの耳が行く

白陽子 白客  
ふさ女 水客  
井蛙 井蛙  
十七八 十七八  
侃流 侃流  
海朗 海朗  
不水 不水  
千帆 千帆  
星華 星華

初耳だ初耳だと唯聞き流し 司 櫻  
珍客へせめて焼酎買ひ添へる 木 陽子  
珍客へ子供は外へ連れ出させ 素 人

川下閣支部大柳川部支閣下川

三月十八日 於 島野ビル三階  
アブレゲール・秘密・饗祭・焼芋・  
寸志・握手

人妻とアブレゲールは死を選び 山雨楼  
名刺にもアブレゲールとすく判り 不 二  
戦後派の見本に立つた被告席 東 夢  
「絶対秘密」よなご女学生別れ 不 二  
ローマ字の女の名も書いてある手帖 好 郎  
秘密主義こゝにも鍵がかけてあり 不 二  
タイヒスト里に子供がある噂 白 星  
税務署にメモ拾はれたのが落度なり 好 郎  
慈善家の古い秘密は誰知らず 守 夫  
お砂糖がこゝんに減つた饗祭 白 星  
父さんは焼酎でよし饗祭 不 二  
饗祭女の意志がやゝ通り 白 星  
風邪ひいた子も起きて来た饗祭 好 郎  
聞きわけのよい子で饗祭の小さ過ぎ 白 星  
病める子に見える所へ饗祭がざり 好 郎  
焼芋屋あみだに負けた娘が一人 不 二  
看板は水屋とある焼芋屋 同 郎  
焼芋が好きと恋人に話さない 白 星  
課長の不参寸志と書いた酒が来る 東 夢  
寸志の御札と云はねはかりの註文書 高 志  
役得の寸志々々で家が建ち 同 郎  
さて寸志にしてもその額ほどは 不 二  
今日からの職場へ握手ありがたし 同 郎  
初恋に不孝をわびる手をのげし 高 志  
握手のやつと握手をして別れ 不 二  
握手には物足りなげな投キツス 高 志  
握手ぐらゐらしてもだらつてもものを 東 夢  
ともかゝる握手で解つたストライキ 好 郎  
一着と二着の握手美くしむ 不 二

川柳雑誌社 ウイロー社句會  
二月廿六日 於 商工会議所  
潮風

雑談へ這ひ出す様な嘘も混ぜ 曉 舟  
雑談へ煙草順々ぬき取られ 草 一 郎  
養子心理時計見い／＼無駄話 同 郎  
雑談のオチは石鹸砂糖なり 法 寸  
雑談の計画視線泳ぎくる 笑 有  
雑談へごゝの詰りはあの話 泉 水  
悪友の話まで出て通夜は更け 快 夢 起  
雑談へさて用件は何だつた 流 水  
雑談を嫁つ／＼ましく聞いて居る 我 樂 多  
腕経を済ませ雑談一ときり 純 香  
雑談の合間に恋もほのめかし 友 郎  
雑談の誰はばからぬ声ばかり 友 郎  
雑談も彼女の弁で花が咲き 友 郎  
雑談は南船北馬果もなし 芳 雨  
雑談へ工場主任の眼が光り 夢 想 児  
雑談に蛙は蛙夜更まで 河 舟  
雑談へ来た行商も話好き X Y Z  
雑談に煙草三本借りられる 同 郎  
来る処まで来た保険屋の話 紅 宿  
飲むものがつきて話にけりがつき 同 郎  
雑談の中にホンマの事も言ひ 同 郎  
雑談にみんな悟つた話ぶり 雨 岩 波  
原爆だ水素弾だと小半日 亨 駒  
氣取屋が居る雑談の硬くなり 一 牛  
雑談の中にも神の声を聴き 同 郎

品質優良  
タチカワペン先  
TACHIKAWA PEN  
大阪市東区豊後町四八  
立川商事株式会社  
タチカワペン  
タチカワセム  
タチカワ



竹原支部句會(廣島縣)  
四月十五日 於 葉留路居  
柳 慶 報  
電燈・旅・人形・手遅れ・スカイ  
ト・花見酒  
トンネルへ尾燈が残る夜の汽車 葉留路  
停電へ隣へ声をかけて見ると 柳 慶  
電燈へ顔を反けてれて見ると 芳 泉  
燈が消えてあらし一そうすくさく 芳 泉  
電燈にストの威力を見せられる 芳 泉  
節電電氣全社の明るすぎ 愛 鳩  
財布もう寂しくなつた旅日記 柳 慶  
途中下車する氣になつた旅行地図 芳 泉  
役得の旅行みやげが持ちきれず 愛 鳩  
名産をすたり並べた旅帯り 芳 泉  
旅の宿浮氣心も出して見る 可 笑

新婚が同じ柄着る旅の宿 葉留路  
半生を只人形であつただけ 可 笑  
人形を持たせば日本一人の人 芳 泉  
もみ消しが遅れ町ボスあつて出し 葉留路  
手おくれがよかつた土地の値が下り 可 笑  
謎やつと解けた時分は人のもの 芳 泉  
お行儀の膝スカートが短かすぎ 葉留路  
スカートも同じをつくる仲のよき 愛 鳩  
スカートのしわ母親にまかせき 可 笑  
花見酒それから先は知らぬなり 柳 慶  
花見酒こゝにも一人のびて居り 同 郎  
花見酒とう／＼よその座でつれ 愛 鳩

ラヂオ・目・窓  
ニ死満壘カンとひいて株市況 青子  
春寒き窓にまつげの長い人 緑之助  
想うてる人に窓から見下され 同 郎  
悲しさは閉ざした窓を見て掃り 壯  
へそくりの分だけくじをかくしき へとち  
宝篋の夢も買えないこのくらし 茂郎  
からくごへ妻の叱言のくじすま 緑之助

川下閣支部大柳川部支閣下川  
三月廿二日 於 喜多座別宅  
尼 綠之助 報

### 岡山支部分會 (岡山縣)

四月廿日

於岡山農業文化博覧會

驚農・牛・夜なべ・供出・夕焼  
 むつりトカメラの前へ驚農家 吉備平  
 驚農の娘月給取りが好き 風來子  
 貧しさがつゝ驚農に育てあげ 寂句榮  
 遊つくりと牛足もとを見て歩き 七面山  
 盗まれる牛は素直について行き 碧雲  
 嫁に來て行く牛を家中出て送り 久米雄  
 賣らね行く牛は牛の眼動かさぬ 久米雄  
 いたわつてやれば牛の眼動かさぬ 久米雄  
 田の隅で牛は小さく曲らされ 同  
 新妻も言い訳程の夜なべをし 同  
 ボタン付け丈を明日に残して寝 同  
 隣まだ夜なべの中の笑い声 同  
 供出のパーセント争つては 白・竜  
 供出をすまざれば税が待つていた 漢句榮  
 供出の村一番はかゆを食へ 七面山  
 夕焼へ旅靴まだ宿がなし 久米雄  
 夕焼の直下は母のおわす里 茶々  
 不機嫌へ一杯つける妻の智慧 こうき  
 少々は薬になると母の酒 茶々  
 まだ取らぬ皮算用の酒を飲み 碧雲

川 岡山大學支部分會 (岡山縣)

五月六日

於醫學部記者室  
大森風來子報

患者・辞書・天使・薬  
 患者には言えぬなやみも税のこま 加代  
 スラングへ辞書懸命にめくられる 濁年  
 丁度よい辞書を枕に畫経する 天竜  
 辞書すすり並べて眠る春の宵 尚子  
 父さんの辞書へ眼鏡を運ばされ 七面山  
 落第の吹けばほこりを立てる辞書 正一  
 探したい字がない辞書を侮られる 聴夢  
 和美辞書愛の言葉が探される 風來子  
 ふざけても天使すいこよひて行く 天竜  
 手の荒れた天使糊帯してくれる 聴夢  
 往年の天使産婆で終りなり 淑郎  
 天使にもやつぱりありませうとひき 天竜  
 白衣脱ぐ天使の部屋に流行歌 濁年

### 姫路支部分會 (姫路市)

三月三十一日

有馬吟行 木下和水報

風邪引いて酒が薬の年となり 聴夢  
 水薬冷たく患者の手に移る 周平  
 なほるとは云はす薬を飲まざる 北星  
 薬瓶泥濁の世が捨て切れず 久米雄

花見・村・温泉・風呂敷  
 街頭写真機トネル越えたとき 和夫  
 一文無しだと花見に変わりなし 凡六  
 サンドキッチで花見をどうみる アブレ型 燕  
 寝台の向きかへてどろろと花を見る 孤  
 羽織ぬぎにまだ早過ぎる花見を 燕  
 花見酒浮かれ浮かされてのびのびと 燕  
 花の下あやししい酒を強いられる 燕  
 疎開した村でお経を覚えて來 燕  
 村娘内緒でダンスにいたかの煙 揚  
 さいさいと軋むつるべも村らしく 一  
 この村も春の盛りの中にあり 一  
 こゝからは一人ていれる村は 一  
 病人の伴で温泉ばつとせず 同  
 温泉で老らくの肌つくく見 同  
 エレジーを出した程の温かさ 二  
 夜半の湯に氣兼遠慮もなき一人 二  
 温泉地持病を持って又出かけ 孤  
 温泉に來れば霏かな雨になり 葉  
 温の町で見えたよな人にも逢ひ 葉  
 温の町で会へば互にそれで行き 葉  
 混浴と聞いて一同勇み立ち 同  
 風呂敷がネットチーフがアブレ型 同  
 んこからか風呂敷を出す賢夫人 樹  
 お土産の風呂敷をどとさうて見 樹  
 退院は風呂敷包み一つなり 樹  
 風呂敷の昔の紋がなつかしく 樹  
 揚子市  
 樹水市  
 樹水市  
 樹水市

### 吳支部分會 (吳市)

四月八日 於林野麩光居

氣まゝ・春の宵・酒・賽銭・紅・  
 顯ひ  
 未亡人昔の氣まゝ恋しがり 清光  
 出戻りの姉が氣まゝな夜の膳 正一

### 貴生川支部分會 (滋賀縣)

四月廿九日

於美秋居 美秋報

生さぬ子の氣まゝな世を吐つて見 梅  
 あの方のおかけ氣まゝな世を過し 浪  
 後入りの氣まゝで家は左り前 三  
 春の宵そんな氣持もあつた過去 三  
 春の宵なんのかんと落つかず 光  
 來ぬ人を爪弾で待たず春の宵 三  
 ゆつくりと歩調が合つた春の宵 六  
 酒のせいとは文化人らしくなし 一  
 酒となる前に意見は聞かされる 光  
 合成酒ですがと女房恐縮し 鹿  
 ハンドバック探し賽銭や投げ 鹿  
 成功をするまで賽銭借るつもり 高  
 掃除する様に賽銭掃き集め 馬  
 ルージエ濃く旅藝人の三等車 六  
 新妻に背廣の紅を見つければ 紅  
 紅筆を今宵最後の舞台裏 紅  
 願ひ事すめば知らず顔になり 梅  
 娘の願ひ晴れて春待つ日の近し 香  
 光

風呂敷・旅・賽銭  
 風呂敷の風呂敷十等は欲しがつて 木  
 手品師の風呂敷十等は欲しがつて 木  
 銭湯へ行く風呂敷になり下り 木  
 古ぼけた風呂敷がつき屋に見られ 木  
 風呂敷に少し折もある待ぼうけ 木  
 風呂敷も新妻といふ色を持ち 木  
 從急期旅でうつぶん晴らして來 木  
 督促が待ちうけて来た旅婦り 木  
 蜜月の切符がさされて胸に入れ 木  
 世のうとき人善光寺の旅に入る 木  
 旅にしてあれば林檎を皮むきからり 木  
 臨月は祭へ賽銭ことづける 木  
 同 春

### 日の丸句會 (鳥取縣)

五月十一日 於故田中社長宅

弔句・椅子・追憶・花・ビール・  
 父  
 後任へ万事たくして椅子をあけ 秋  
 争つた椅子が空いてる議會なり 芳  
 何んの氣もなく老婆へ椅子ゆかり 高  
 社長室むなしく椅子に泣きくづれ 花  
 診察の廻轉椅子が廻り過ぎ 雲  
 樹

一生を椅子と過して意味がなほ  
 もう俺に課長の椅子がまはる頃  
 大臣の椅子二三遍待たされて  
 角力とる頃は社長も若かりき  
 追憶は帽子の型が目につぎ  
 話好き私なんかをお相手に  
 肩車父のいませし頃のこと  
 ありし日の社長のお手付け尻に  
 三七日の縁側に出てさうと見る  
 氣分轉換ひとり者花かざり  
 生花の女房に流儀なかりけり  
 のごもとで一ゴクン生ビール  
 一本のビールに妻を見直して  
 大掃除は幾歳の金コロコロと  
 思ひ出は幾歳の黒ビール  
 ビールなら賛成をする数が増え  
 アレゲル親父なんかと恐ろし  
 目に見えて母と別れてからの父  
 せつなさの花輪を持ちて橋岸寺  
 社長の死を妻も便りに書き入  
 花輪みな錦旗の如し社葬の日  
 三七日の涙あらたに香を焚き  
 最後とも知らず手入れと美聲也  
 新築の椅子にも座さず社長逝く  
 新築の祝ひをすするに還らない  
 地におちる星の流れをなほ見  
 晴天の霹靂なんぞ無情なる  
 やすらかに眠る御體に捧ぐ文字  
 太陽を失ひし身に何の世ぞ

**母袋未知庵著**  
**川柳信濃國**  
 信濃へあこがれを持つ人は多  
 いが、ホントの信濃を知つて  
 る人は尠ない。先づ本書によ  
 つて江戸文学から、信濃を探  
 れ！B6 300頁 三三〇円 三三三〇円

發行所 **しの川柳社**  
 松本市大名町七二



### 編輯室にて

▼生きればならぬ間に大きい小さいはない。「文藝春秋」がよい原稿を蒐めるために懸命に流しているのと弊誌があぶら汗を流して編輯に努力しているのと何卒変りはないが、彼は何処までも営業誌であり、こちらは営利の雑誌でない点は大いに違ふ。私達は柳界のためにやむに違ひ、やまれぬ心から出していることを誇りとするものである。何分の御支援が願いたい。

▼表紙「千日前」は由比種三郎画伯を煩はした。近ごろ私の句碑が各地に建つ。大阪のド真中に一基、大和宇陀郡の山上に一基、岡山縣弓削駅前に一基(コレは目下金割申)、これでは死んでも墓の必要がない。貧乏詩人にとってこれ位有難いことはない。この外にまだ私の胸像を創つてやるのと、またこんな企劃が私をすつばからしてまともなつてゆくのである。なんだか、くすくす話である。▼みなと出来るだけ顔を含はしたくないと思つて昨秋、北極星の三階に難波連絡所を設け、毎日より後から出勤して来たが、今度北極星の三階がホテルに改造されることになつたので六月の六日限で連絡所を閉鎖することにし、目下移轉先を物色中である。当分不便ではあるが御用の方は社の方えお運びが願いたい。連絡所開設中、種々御懇情をたまわりました社主、支配人、従業員諸氏並びに同所へ繁々お運び下さつた柳友其他の諸氏も謹んで御礼申上げる。(路)

### 一動一静

▼本社六月旬会は三日午後六時半

から大空文化会館三階で柳秀忠(故長崎仙太郎博士)を修した。大阪南支部は六月十七日午後六時半から阿倍野王子神社で開催。大阪週信病院川柳会は六月十七日午後二時から三階図書室で開催。南海電鉄川柳会は六月廿二日午後五時半から三階休憩室で開催。南区医師会文化館川柳会は六月廿日午後七時から無名林居で開催。上何れも路部主幹出席。川維岡山大學支部旬会は六月三日、大學内で開催された。川維下関支部六月旬会は福王寺で開催。「川柳町弓削」が六月十日、岡山放送局から下記の人々によつて放送された。弓削平、笑泉、七面山、鉄見、十九平、娘句樂、苑女の諸氏。川柳角力大会(今治市)が川柳普及の目的で五月廿一日に茶道会館で開催された。市制十周年川柳大会を開催され

不朽洞会から白柳子氏が出席。帆傘旬会(高知市)が六月五日迷遊居で開催され不朽洞会から青明氏が出席。川維岡山縣廳川柳同好会が六月十日廳内で開催。不朽洞会から久米雄、鉄見、七面山、笑泉、淑郎の諸氏出席。東野大八氏(今治市)は中学生新聞に川柳講座を連載されている。川柳ながさき(新大工町五長崎川柳社)は六月号から四六横綴の活字誌となり面目を一新した。北垣岫也旬集、このはな(五月十日京都市下京区佛光寺西洞院西山呼川柳社から刊行された定価八十円)速水真珠洞氏は福岡市博多下店屋へ移轉された。梅川昌木子氏は堺市三國ヶ丘町三ノ一〇八小林方へ移居。大家無患子氏(岡山縣)が「夕刊山陽」第六回読者文藝川柳第一席(賞金千円)に当選された。

風趣豊かな

御評判の名物食堂再開……

お好み食堂

おてんぶら    〇とんかつ  
 〇おでん    〇中華料理  
 〇お酒    〇ビール  
 〇フルツジユール

七階

松坂屋 大阪 日本橋

チトお笑いに  
お越し下さい

戎橋松竹

酒のめがけ

酔いのめがけ

ヤッコ

酒販用紙コップ    アイスクリーム用紙コップ  
 其他食堂用紙製品一切

大阪市阿倍野区晴明通一丁目  
 特殊紙器工業株式会社  
 フタバカツプ株式会社

電話 天下茶屋 二八〇二番  
 二八〇三番 二二三九一番

山之内

血圧降下に  
アーグレン

定剤注射

血管アクトホルモンとアミン塩類

山之内製薬

Made in Occupied Japan

川柳雜誌 第五卷

一冊 金三〇円 (送料三円)

牛ヶ年概算 金一九八円  
 一ヶ年概算 金三九六円

昭和廿五年六月廿五日印刷  
 昭和廿五年七月一日発行

大阪府住吉區南代四丁目二五番地  
 發行所 川柳雜誌社  
 電話 日橋 七五〇五〇

大阪府住吉區南代四丁目二五番地  
 發行所 川柳雜誌社  
 電話 日橋 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

ビール(十句) 菊沢小松園選 (七月廿五日開始)

聖書(十句) 高鷲亞鈍選 (八月廿五日開始)

毎号募集

近作柳樽雜誌廿句 麻生路郎選  
 川柳塔(雜詠) 麻生路郎選  
 文章(評論・研究・感想其他) (廿五日開始)

投稿規定

▼投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
 ▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。  
 ▼「課題吟」は何人でも投稿が出来る。  
 ▼「川柳塔」への投稿は不朽洞会員に限る。